

変化を明らかにしている（山崎・小畑1983）。福岡地方の早期における石鏃変遷は、柏原F遺跡の層位的成果でその大枠が確認されたのである。

⑤ 福岡地方における縄文時代初期石器群の変遷

福岡地方の縄文時代草創期末から早期中葉にかけての、代表的遺跡の概要を述べた。編年関係で明らかな部分も多いが、不明な部分も残っている。ここでは福岡地方における石器群の編年を試みるとともに、元岡・桑原遺跡群58次地点各層の位置付けを行いたい。

草創期末は、大原D遺跡第14区Ⅱ・Ⅲ層（池田ほか2003）、元岡・桑原遺跡群3次地点下層（菅波ほか2004）、松木田遺跡4次調査2区（米倉ほか2013）で出土している。上げ底の条痕文・無文土器とともに、二等辺三角形鏃、背面細調整ある円形刃部搔器などによって特徴づけられる。部分磨製石鏃の割合は低く、石槍も定型化していない。大原D遺跡第14区に最初に居住した人々は、部分磨製石鏃を持っていない可能性もある。

最古と考えられる、大原D遺跡第14区Ⅲ層石鏃の大半は図134 42のような挟りの浅い三角形鏃であるが、脚の尖るものや帖地型（大久保型）石鏃など多様な形態が少数含まれる（図132 38～62）。特徴的な形態である帖地型は、元岡・桑原遺跡群3次地点下層や松木田3次地点にも認められ、長期間存続すると考えられる。分布の主体は西北九州にあり、南九州でも検出されている。

大原DⅡ層や松木田遺跡4次2区でも、二等辺三角形鏃（38・36）が主体を占めている。その長さは大原DⅢ層2.11cm、Ⅱ層1.91cm、元岡・桑原遺跡群3次地点1.96cm、松木田4-2区1.68cm、と小形化傾向が認められる。しかも、小形化に伴い挟りのない細長の二等辺三角形鏃の割合が高くなっているのである。石槍の存在は顕著でないが、元岡・桑原遺跡群3次地点では定型化した細長のものが認められる。ただし、混在である可能性もある。縦長の背面細調整ある搔器や円形搔器は、大原D遺跡14区（39・40、43・44）や松木田遺跡4-2区（37）、大原D遺跡15区で検出されており、当該期を特徴付ける可能性が高い。

早期前葉を最も特徴づけているのは、松木田遺跡3次地点である（米倉2001）。挟りのほとんどない三角形鏃、二等辺三角形鏃（17）も残存するが、脚部の尖る石鏃（18～21）が主体を占める。部分磨製石鏃（19・21）の割合が高いのも特徴の一つである。脚部の尖る石鏃の中に、下半部が円味を帯びるもの（20・21）が認められる。脚部が明確な角状を呈するものはまだ出現していないが、帖地型石鏃は検出されている。石槍（23・24）も定型化しており、部分磨製石槍（24）も認められる。搔器は円形刃部を呈するものは共伴しないが、特徴的な縦長のサイド・スクレーパー（22）が認められる。同じような石器群は松木田遺跡4-1区でも検出されており（長家ほか2013）、石鏃も同じ形態で、大きさもほぼ同じ（3次地点長さ1.83cm、4次1区1.78cm）である。

これらと最も近いのは、元岡・桑原遺跡群3次地点中層である。脚部の尖る石鏃が主体で、部分磨製石鏃（図131 35～40）の割合も高く、部分磨製石槍（図131 47）も組成されている。縦長のサイド・スクレーパー（図131 48）も認められる。石鏃は松木田遺跡に比べやや大形で、長さ2.03cmである。形態的にも豊富で、飛行機鏃（図131 30・33・40）や先端が円味を帯びるもの（図131 20・21・25）などがある。松木田遺跡に特徴的な、下半部が円味を帯びるもの（図131 22・23・29）も認められる。

柏原F遺跡Ⅲ層4ブロック（山崎・小畑1983）も早期前葉に位置づけられる。長い脚部を持ち尖っているものが主体で、部分磨製石鏃の割合も比較的高い。その他三角形鏃も認められる。松木田遺跡に特徴的な下半部が円味を帯びたものも認められる。Ⅲ層には石槍は認められず、定型的なスクレーパー類も組成されていないようである。

これらの時間関係については研究者間で一致しているわけではなく、特に松木田遺跡の位置付けには違いがある。その主な原因は刺突文土器と撚糸文土器の前後関係にあり、柏原F遺跡Ⅲ層などの

刺突文土器を草創期に位置づける研究者もいる。確かに、刺突文という文様は泉福寺洞穴（麻生編1985）など草創期遺跡に確実に存在し、早期の押型文土器期まで存続している。よって、その変遷過程を明らかにせねば、松木田遺跡の編年的位置の解決には結びつかないであろう。ここでは、石鏃を中心とする石器から編年関係を検討すると共に58次地点の位置づけも併せて行いたい。

大原D遺跡第14区に始まる三角形鏃と松木田遺跡3次地点の石鏃には連続性は認められず、その間に何らかの文化層が存在すると考えられる。松木田遺跡は、三角形鏃を組成するものの主体は脚部の尖るもので、完成した姿を見せている。直線状の長い脚部を持つものと、下半部が円味を帯びるものがあり、前者は部分磨製を施したものが多い。部分磨製石鏃の割合も高く、石槍にも及んでいる。これと最も近いのが、元岡・桑原遺跡群3次地点中層である。ただ石鏃は多様な形態を含んでおり、松木田遺跡のような単純な様相ではない。

草創期末から早期前葉にかけて石鏃の主体は、二等辺三角形鏃から挟りが深く脚部の尖るものへと変化しているが、さらに細かな変化が認められる。この過程で重要なのは、元岡・桑原遺跡群58次地点第Ⅳ層とⅢ③層であると思われ、詳細に検討したい。

58次地点第Ⅳ層は、大原D第14区Ⅲ層→同Ⅱ層→松木田4-2区という二等辺三角形鏃の小形化とは異なり、形態や大きさに異なる原理が働いている。二等辺三角形鏃も残存しているが、脚部の尖る石鏃が一定の割合を占めている。各形態平均の長さは2.11cmで、大原D第14区Ⅲ層と同じである。58次第Ⅲ③層は、さらに挟りが深く脚部の尖る石鏃の割合が高くなり、主体的形態となる。平均の長さ2.10cm、重さ1.06gで、第Ⅳ層とほぼ同じである。この挟りの深い石鏃が主体となるに伴い、両側縁への鋸歯状細調整が顕著になるようである。両層共に三角形鏃の挟りは殆ど認められず、松木田4-2区の在り方と類似している。松木田遺跡3次地点に特徴的な下半部が円味を帯びる石鏃は認められず、福岡地方における小形円脚鏃の出現以前と考えられる。このように、二等辺三角形鏃から脚部の尖る石鏃への形態変化を繋ぐものとして、58次地点第Ⅳ・Ⅲ③層を介在させると良く理解できるのである。

スクレーパー類は、58次地点第Ⅳ層で背面調整を施した円形刃部の特徴的なもの（図134 33）が認められる。小形品が主体だが、安山岩製の大型品（図89 S351）も検出されている。大原D遺跡第14区にも、背面調整を施したやや縦長のスクレーパー類（図134 39・43）が多数出土している。ところが、端部に細調整を施した事例は少なく、正面に調整痕の殆どないものもある。大半は小形品だが、安山岩製大型品も認められる。58次地点第Ⅳ層においても、円形刃部を呈するが正面に調整痕のないもの（図89 S350・S352）が認められるが、背面調整は端部近くの同じ部分に施しており、規則性がある。大原D遺跡第14区では、端部の正面形が半円形でなく四角形を呈するものも多い。58次地点第Ⅳ層例を完成形とすれば、大原D遺跡第14区のスクレーパーは初源期の形態と判断される。この石器は極めて特徴的な形態で、後述のように、大原D・元岡型スクレーパーとして設定している。この種の搔器は、元岡・桑原3次地点下層でも少数出土している。

大原D遺跡第14区では、これとは別に円形を呈する小形搔器（図134 40・44）が認められる。背面調整を有するものと無いものがあるが、形態的完成度は高い。平面形が円形をなし、細調整は全周の50%以上に及ぶ。これと同じような搔器は、広い範囲の草創期遺跡に認められる。元岡・桑原3次地点下層、松木田遺跡4次-2区でも同じような搔器（37）が検出されている。58次地点は、第Ⅲ③層において典型的な円形搔器（28）、第Ⅳ層でも類似品が（34）出土している。全国的に草創期末にスクレーパー類が発達するが、この形態の搔器が広く認められるのである。

大原D遺跡第15-3区でも、背面調整を施したやや縦長の搔器と典型的な円形搔器が出土している。石鏃は下半部が円味を帯びる長脚鏃が認められ、その形態は異なっている。大原D遺跡15区は不明な部分が多いが、少なくともこの時期の遺物が含まれているのは間違いなからう。

石鏃の変化とスクレーパー類の形態から、大原DⅢ層→同Ⅱ層・元岡3次地点下層→松木田4-2区→元岡58次地点Ⅳ層→同Ⅲ③層という変遷が考えられる。これらは円形刃部のスクレーパー類が発達しており、寒冷期に特徴的な毛皮の加工等の活動と結びつくものと考えられる（堤2000、萩原2001・2008）。大原D遺跡の放射線炭素年代測定値などから、寒冷化の著しいヤンガー・ドリアス期に相当する可能性が高い。

元岡58次地点第Ⅲ③層は細長の石槍（図134 29）が認められ、松木田3次地点に繋がる形態と考えられる。元岡3次地点中層にも同じような石槍が認められ、部分磨製石槍や縦形スクレーパーも組成している。石鏃の形態も共通している。松木田3次地点や元岡・桑原3次地点中層は、下半部が円味を帯び脚部の尖る石鏃によって特徴づけられ、脚部の挟りも深くなっている。これが一つの画期であり、58次地点第Ⅲ②・Ⅲ①層の石鏃（11～14）はこの流れの中で理解できる。

58次地点第Ⅲ③層は下半部が円味を帯び脚部の尖る石鏃が認められず、松木田3次地点より古く位置づけられる。縦形サイド・スクレーパーや部分磨製石槍を組成しないことも、松木田と異なる点である。しかし、遺物量が十分でない場合は十分な注意が必要である。

58次地点第Ⅲ③層と松木田3次地点の間に文化期が介在する可能性があるが、押型文土器出現までの間に元岡・桑原3次地点中層、58次地点第Ⅲ②・Ⅲ①層、柏原F遺跡Ⅲ層などが位置づけられる。これらは刺突文土器や撚糸文土器と共伴しており、土器型式において編年関係が論じられているが、石器においても若干検討してみたい。

石鏃の大きさは、松木田3次地点1.83cm、4次1区1.78cm、元岡・桑原3次地点中層2.03cm、58次地点第Ⅲ②層1.93cm、Ⅲ①層1.93cm（c類除く1.79cm）である。松木田遺跡群がやや小形だが、大きな差とは言えない。同じ文化期でも、遺跡間で若干の違いが想定されるのである。

松木田段階で磨製技術が極限に達しているようであり、以後衰えるものと思われる。部分磨製石鏃の割合は、松木田3次地点44%、松木田4次1区31%、元岡・桑原3次地点中層19%、柏原F遺跡Ⅲ層17%、58次地点第Ⅲ②層20.1%、同Ⅲ①層3.8%であり、有意な変化と言えそうである。58次地点第Ⅲ②層、3次地点中層、柏原F遺跡はほぼ同時期ではないかと思われる。ただ、58次地点第Ⅳ層やⅢ③層も部分磨製石鏃の割合が高く、その遺跡（集団）の性格を表している可能性もある。下半部が円味を帯びる石鏃の割合も編年に関与している可能性があるが、松木田3次地点以外出土数が少なく明確なことは言えない。磨製石槍の組成率も松木田3次地点で最高潮に達するものと思われ、石鏃と軌を一にしている。このように松木田以後の展開は明確でないが、部分磨製石鏃の割合などである程度の変遷過程を追うことが可能である。

その後の変化点は、元岡・桑原58次地点第ⅡAユニットに認められる。鍬形鏃（9）の登場であり、押型文土器の出現と軌を一にしている。58次地点第ⅡAユニット段階では、脚部の尖る石鏃（図134 7・8）の割合が高く移行期に相当すると考えられ、以後鍬形鏃の割合が高まるとともに大型化する。元岡・桑原3次地点上層長さ2.46cm、元岡・桑原58次地点第Ⅱ層長さ2.41cm、Ⅰ層長さ2.40cmである。柏原F遺跡でもⅡ層に大形の鍬形鏃（4）が認められる。ちなみに、大分県稲荷山遺跡の平均長は2.41cmである。これらの遺跡では従来の小形石鏃も認められるのだが、大形の鍬形鏃の登場によって平均値が押し上げられたのである。柏原F遺跡Ⅱ層においても、正三角形鏃（1）、脚部の尖る石鏃（2・3）を組成しており、トロトロ石器も出現する。

このように、主に主体となる石鏃形態の変化によって、編年関係の構築が可能になった。石鏃の形態変化には一定の法則性があり、これとスクレーパー類や石槍の変化を加味すると細かな編年が可能となるのである。その変化を促すものとして、他地域からの影響や自然環境の変化などが考えられる。なお、石鏃の変遷過程などについては小畑（山崎・小畑1983）や米倉（米倉2001、長家・米倉・加藤2013）によって述べられており、啓発されるところがあった。

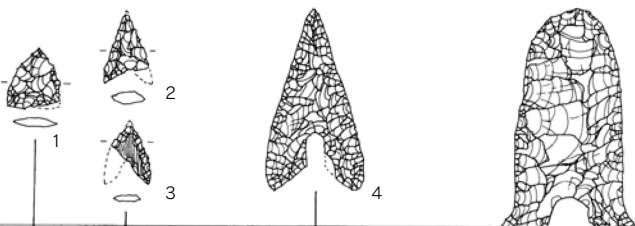
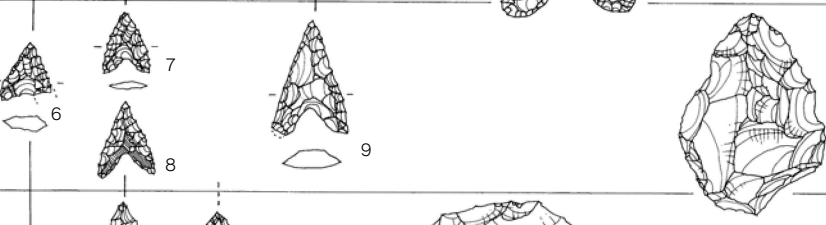

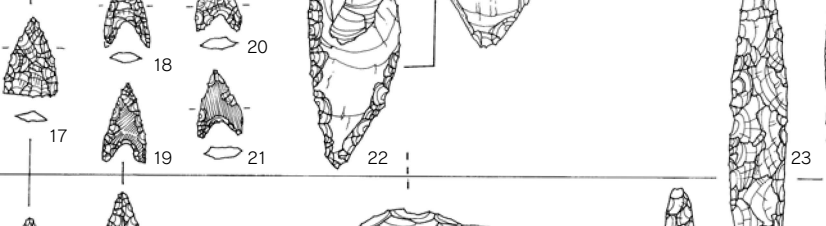
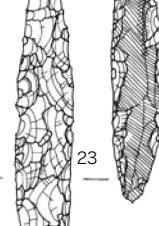
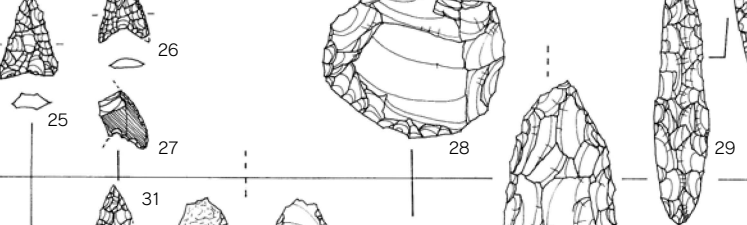
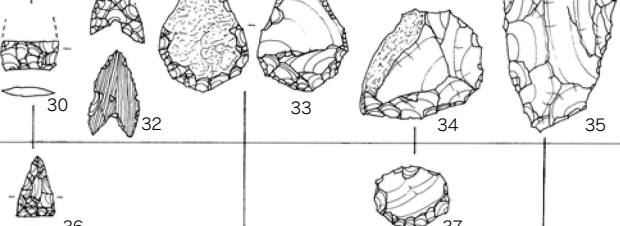
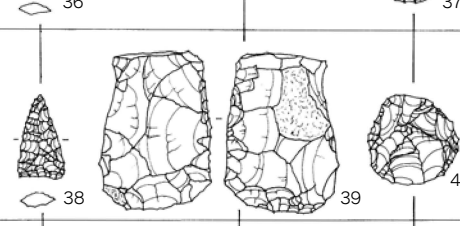
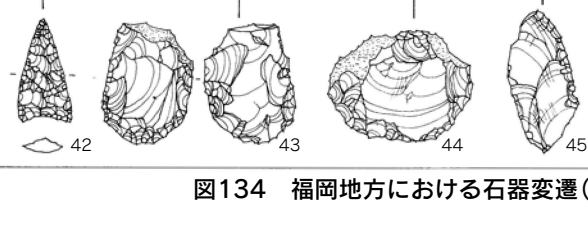
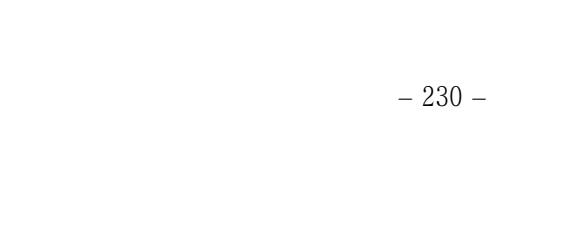
| 主要遺跡 | | 主 要 な 石 器 | 58次地点 |
|-------------|---------------------|--|---------------------------------|
| 早 期 | 柏原F Ⅱ層 |  | I 層 |
| | 柏原F Ⅲ層 第1ブロック |  | ⅡB・C ユニット Ⅱ A ユニット |
| | 柏原F Ⅲ層 第4ブロック |  | Ⅲ①層 Ⅲ②層 |
| | 元岡 3次地点 中層 |  | |
| | 松木田 3次 |  | |
| | |  | Ⅲ③層 |
| 草 創 期 | |  | Ⅳ 層 |
| | 松木田 4-2区 |  | |
| | 大原D Ⅱ層 |  | |
| | 大原D Ⅲ層 |  | |

図134 福岡地方における石器変遷(模式図)

引用・参考文献

- 麻生優編1985『泉福寺洞穴の発掘記録』（佐世保市教育委員会）
- 池田裕司・菅波正人・山口譲二・吉留秀敏・荒牧宏行・星野恵美2003『大原D遺跡群4－大原D遺跡群第4次・第5次・第6次調査報告 縄文時代編－』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第741集）
- 菅波正人・吉留秀敏・池崎譲二・松村道博2004『元岡・桑原遺跡群3－第3・4・8・11次調査の報告－』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集）
- 堤隆2000「搔器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」『考古学研究』第47巻第2号
- 長家伸・米倉秀紀・加藤隆也2013『松木田3－松木田遺跡第4次調査1～3・7・8区の報告－』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1204集）
- 萩原博文2001「縄文草創期の細石刃石器群」『日本考古学』第12号
- 萩原博文2008「泉福寺洞穴の縄文草創期石器群」『九州旧石器』第12号
- 山崎純男・小畑弘己1983『柏原遺跡群Ⅰ－縄文時代遺跡F遺跡の調査－』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第90集）
- 米倉秀紀2001『松木田遺跡群2－第3次下層（縄文時代早期）遺物編－』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第686集）
- 綿貫俊一1999「九州縄文時代草創期末から早期の土器編年に関する一考察」『古文他談叢』第42集